

アフター・コミュニティ? アフター・アイデンティティ?

—在日朝鮮人のアイデンティフィケーションの批判的考察—

文 貞 實

1 はじめに

そう、私は一つしか言語を持っていない、ところがそれは私のものではない。

[Derrida, 1996=2001: 4]

このデリダの宣言は、かつて、植民地主義政策によってフランス語化されたアルジェリアのユダヤ人であるデリダが、第二次大戦中にフランス市民権を剥奪され、後にまた付与されるという事態に巻き込まれる経験から発せられたものである。デリダは、自分の話しているたった一つの言語が自分のものでない、さらにそのたった一つの使用言語（フランス語）は母語ではないが、「外国語」（＝異質な言語）でもないという。このことから一般的に想起される事柄は、「母語」の喪失である。しかし、このデリダの宣言は、旧植民地出身者の言語的アイデンティティの喪失を問うことに主眼があるのではない。一度も所有されなかった言語は喪失されない。このデリダの表明は、一般に、人びとが自然に所有・帰属・準拠しているとされる「母語」の特権的な位置（「国民である」）を批判する作業であったはずである [Derrida, 1996=2001: 9]。小森陽一は、このデリダの宣言を引用しつつ、近代の「日本語」も、この列島に住む当時の人びとにとっては「私のものではない」「他者の単一言語」だったという。明治時代、翻訳語を中心とする「日本語」（標準語）の使用は、「国家語によって、自らの言語体系を組み替えていく、自己を他者化させるプロセス」であり、方言を使用する「アイデンティティ」を崩壊させる過程となったと指摘する [小森, 2005: 246]。しかし同時に、この日本に住む人びとは、「母語」としての「日本語」をとおして「日本人」としてのアイデンティティを獲得していったのも事実である。ここで小森が指摘する「日本語」が母語となり「日本人」が同定される過程と、日本の植民地における「日本語」の公用語使用の過程はまったく別のものといえる。なぜならば、「フランス語」を使用してもデリダは「フランス人」になれないように、「日本語」を使用しても、朝鮮人は「日本人」にならないからである¹⁾。

本稿では、他者の言語を使用しなければ、語ることが絶対的に不可能な状況に置かれている「在日朝鮮人」²⁾をエスニック・マイノリティと位置づける。この「マ

イノリティ」という概念にはさまざまな解釈が存在するが〔岩間他、2007：5－12〕、本稿では、酒井直樹の次の指摘から出発したい。マイノリティとは、「国民共同体のなかで、黙認と否認されているものが何かを一番よく知っている者たちのことになるだろう。歴史が生み出した不均等性の苦汁に満ちた現実を生きることによって、彼らは少数者（マイノリティ）の地位におとしめられたのだから」〔酒井1996：ix〕。ここで重要な視点は、マイノリティとは「自己表明」ではない、自らの名乗りではないということである。それは、他者が誰かを「マイノリティ」として確定して、名指す行為によって生み出されるなにもものかである³⁾。そして、日本の領土においてマイノリティとしての地位を付与されてしまった「在日朝鮮人」には、ただ一つの義務だけが求められてきた。それは、ある日突然、すべてを奪われ（1952年サンフランシスコ条約発効）、異国の地で老いてきた一世たちの身世打令（シンセタリヤン）から始まり、子ども、その孫の世代までその身の上に刻まれた圧倒的な暴力の痕跡（黙認と否認の徴）を無効化する、ナショナルな意味での「日本人」や「韓国人」が求める物語を紡ぐことである⁴⁾。

本稿は、筆者のここ数年のエスニック・コミュニティ（東京荒川・足立区、神戸長田区）でのインタビュー調査〔文、1994：2000：2006〕で出会った人びとの語りと日本社会のなかで表象される在日朝鮮人の物語との間に広がるある種の“落差”に違和感をもったことから出発している。このことは、在日朝鮮人が集住してきたエスニック・コミュニティ内部で生成される物語（モデル・ストーリー）と日本社会内部で表象される在日朝鮮人の物語が、一見全く違う事柄を表明しているように見える事態について考えるものである。また、それは、日本社会のなかで在日朝鮮人が偽装された知識や承認の手続きによって表象することで、実際には、かれら彼女らが在日朝鮮人から徹底的に「言葉」を奪う行為であることを確認することである。そして、在日朝鮮人と名指される・表明するかれら彼女らの「語り」を聞き分ける耳をどのようにもてばいいかを考えるものである。

2 在日三世のカフカ

数年前、ある若い日朝鮮人の友人と話していたときだった。…彼が咳くように言った言葉が、いまも耳について離れない。「自分の名前などどうでもいいのです。カフカの主人公のようにKとでも名のりたいたいです。」若い友人は、自分は日本人でも朝鮮人でもない、そしていわゆる「在日」でもありたくない、一個の個人でありたいのだ、という意味のことを語りつづけた。〔市村、1994：153〕

「在日三世のカフカ」は、「名前などどうでもいいと」表明しながら、一方では日本語訓み、他方では朝鮮語訓みの別々の「名前」で友人たちの前に現れて、周囲の日本人を当惑させる。それは、かつて、彼の「本名宣言」がもたらした周囲の混乱を再現するようなものかもしれない。彼は「日本人でないもの」、そして、「何者でもないもの」という二重の欠落状態を埋めるような形での「在日」という曖昧な存

在を引き受けることさえも拒否する。そこで、彼は、「どのような与えられた存在規定にも同化しない『自分』を生きる」[市村1994：172] ことで、「徹底的に何ももたないもの＝カフカ」として日本人と対峙しようとする。しかし、この「在日三世のカフカ」は何ももたない位置に自分を置くと表明する、その言説行為によって、結局、自己の「存在証明」を表明しようとする「アイデンティティ問題」に絡め取られているように見える [石川、1992：17]。

1980—84年の4年間、東京都立松沢病院の勤務医だった黒川洋治が関わった在日朝鮮人の「患者」には、表明すべき「名前」さえなかった。彼は「症例E、鑑別不能型統合失調症F20.3」と、カルテに記された症例名で語られる存在であった。

【症例E、鑑別不能型統合失調症F20.3】

男、1956年生、国籍：日本、在日二世。父親は1938年頃、同胞数名と来日し、九州の炭坑で働いていた。その後、同胞の多いO市に移り、日本人であるEの母親と結婚した。Eは母親の籍に入ったために日本国籍である。…（間もなく両親は離婚し、母子家庭となる。その後父親は死亡。母親は在日韓国人と再婚）。本人は小学校4年生の時、父親が朝鮮人であることを知り非常なショックを受け、その後、このことは他人に絶対口にしない秘密となったという。…中学生になると本人は不自然なほど「日本人」として振る舞おうと意識するようになった。中学卒業後、養父との気まずさもあり、家を出てプレス工になった。同僚に「男らしくなれ」といわれ、粋がって上腕に牡丹と桜、「日本男児」と刺青を入れた。…（工場が倒産後）19歳の時、自衛隊に勧誘され入隊した。隊での生活は、「男。日本人。勇気」などを本人に鼓舞し、Eは自己を団体生活に過剰適応させることを通して、忌まわしい過去を排除することに成功した。（入隊1年目に、「ソケイ舉丸」と診断され、手術・入院を経て除隊。除隊後は仕事を転々とする）…23歳のとき、家で大暴れしてガラスを割り、精神科救急を経て都立M病院に措置入院となった。診断は統合失調症（入退院を繰り返す）…（面接の中で）「バンジョッパリ、おまえは日本人じゃない、日本人と結婚できない、どこかに行ってしまえ」…「男じゃない、マスターベーションばかりやって」（という幻聴の内容を語る）。

[黒川、2006：77 文中の（ ）は筆者の補足]

症例Eが語る「地域社会からの排除」「日本人否定」の語りに注目する黒川は、在日朝鮮人のエスニック・アイデンティティを類型化して、マージナル・アイデンティティ（「日本人」と「朝鮮人」の葛藤的存在：Marginal Identity）、カウンター・アイデンティティ（対立・葛藤を乗り越えるアクティブな存在証明を表明するタイプ：Counter Identity）、擬似的アイデンティティ（印象操作・アイデンティティの管理：As-if (Borrowed Identity)）の3つのタイプを分析する（主観主義的アプローチ）⁵⁾。黒川は、これらの分類の背景として、在日朝鮮人一世から三世の、どの世代のアイデンティティ形成においても、日本社会が「常に狂気に引き込んでいくと

ころの全体的構造、社会構造」[黒川、2006：108-109]が用意されている点を強調する。しかしここで、黒川は、在日朝鮮人の「アイデンティティ」を人格の発達概念として捉えられてしまったために、Eの「日本人」になるための努力（「日本男子」の刺青、自衛隊入隊）が「不適格者」（「ソケイ擧丸手術」・去勢不安・自衛隊の除隊）の烙印によって無効となったときに現われた「幻聴」を聞き損なっている。黒川は、Eの「幻聴」（他者の言語）が、奇妙なことに他者がEに求める「存在証明」（アイデンティティの構築性）であることを聞き違えている。

この聞き違いは、市川が「在日三世のカフカ」の「日本人でもない」「何者でもないもの」そして「在日でもないもの」という三重の欠落状態を聞くときもおきている。ところで、固有の名前をもたないKやEの語る物語は、どこで、誰に向かって語られたものだったのだろうか。

3 「パリス吉祥寺中野店」

「うちさ おやじが在日やろ ほんで、おかあちゃんがフィリピン人。それで何でか私は日本人」

「うちてさ、パリス吉祥寺中野店みたいやろ？（どこやねん 誰やねん 私はあははあははは）」

「ホンマや メガネのパリミキ梅田店みたいや」

「上のお兄ちゃんどないしてるの？」「先週リコン 台湾人の嫁が全部子どもつれて出てった」

「下の兄ちゃんは？」「また入った 今度はながいで」

「それから だんなが女つくって出て行きやがった」

「どないなっとんね うちの家は どいつもこいつもばらばらに なりいくさって」

「私は子ども連れてうまれたとこ帰ってきて 地べたにおちた種みたいやけど みっちゃんはたんぼほみたいやね」

[西原、2006：Story4]

西原理恵子の作品『パーマメント野ばら』には、主人公の高校時代からの友人として、在日朝鮮人二世の「みっちゃん」が登場する。この作品には、高知県出身の作者（1964年生れ）の原風景のような、荒廃した地方の漁村を舞台に村で唯一の美容院でパンチパーマをかける元気な女たちの日常（生活力がまったくない男たちを尻目にたくましく生きている姿）が“ヘタウマ”スタイルで描かれている。「みっちゃん」も浮気性の夫と離婚し、村で唯一のフィリピンバブを切り盛りしている。作品のなかの一つひとつのストーリーには、女たちが話したいことだけを話し始める瞬間のヒリヒリする痛さが描かれている。そこには、「みっちゃん」の父親のエピソードにあるように、何万回も語られてきた・説明されてきた在日朝鮮人の一世たちの「典型的な物語」（幼い頃は極貧生活、必死に働き、パチンコ屋、飲食店のオーナーになる成功談と家族崩壊の物語）と、地方都市の女たちの何万回も繰り返

される「平凡なラブストーリー」（夫の浮気・離婚、重労働、母子家庭）が重なることで、かえってその登場人物一人ひとりの「いま・ここ」で生成される現実が浮上している。だからこそ、「パリス吉祥寺中野店」（異種混合）と自己表明する「みっちゃん」は、父親が朝鮮人、母親はフィリピン人、自分は日本人（夫が日本人で日本国籍取得?）、兄の嫁は台湾人という「ぐちゃぐちゃな家族」を振り返って、ひとり呟く（「どこやねん 誰やねん 私は あははあははは」）。

作品のなかの主人公は、「みっちゃん」の呟きを聞くなかで「たんぼぼみたいやね」と応答している。もちろん、「たんぼぼ」という名指しは、たんぼぼがキク科の植物で在来種と外来種があり、外見上は区別がつかないことをいっているのではない。その表面の花や茎を刈っても根さえ残っていたらまたすぐに生え出す、生命力の強さを指している。その生命力は、土地と繋がりをもって生活を営む「みっちゃん」の生きている「現実」を示している。ここで主人公は、どこかの・誰かの呟きではなく、しっかり「みっちゃん」という固有名をもつ在日朝鮮人二世の呟きを聞いているのである。

『パーマネント野ばら』では、在日朝鮮人二世の「みっちゃん」の父親が、その昔、貧しくてその日食べるものにもこと欠いていた時代、電信柱を切ったき木と銅線にしてヤミで売って、子どもたちを養っていたエピソードが語られる場面がある。それは、在日朝鮮人二世の「みっちゃん」のアイデンティティをめぐる表象（消費化）に対して、在日朝鮮人一世の、生活保護を支払われなかった「歴史」の代償（現実化）として描かれている。

「お父ちゃんやめてっ あのなっ今、家なっ お米あるし、おつゆもあるでっ」
 「もうなっ たき木売りに行かんでもええし 銅線あつめんでもええのっ」
 「あっそや今日、生活保護金支給される日やで お父ちゃん、家族で焼き肉しよっ」
 「うわっ それ初耳や みっちゃん 父さん。パチンコ屋とフィリピンパブしてんのに生活保護もろうてんの？」
 「何ゆうてんのー お父ちゃんがこないに立派になるために人の何倍努力したと思てんのー 努力したからこそ生活保護もらう権利があるんやないか」

[西原2006 : Story 4]

パチンコ屋やフィリピンパブの経営者として経済的に成功した(?)「みっちゃん」の父親（在日朝鮮人一世）には、「努力したからこそ生活保護もらう権利がある」というむちゃくちゃな論理が語られている。この一見むちゃくちゃな語りは、支払われなかった負債への請求である。この一点で、『パーマネント野ばら』という作品は、在日朝鮮人をめぐる言説編成のなかで、他の作品と違う稀有な位置を占めているといえる。なぜならば、近年の小説・評論や映画のなかで過剰に表象される在日朝鮮人の物語（「在日朝鮮人であること」「在日朝鮮人と名指されること」）をめぐるアイデンティティの攻防）が、あっという間に商品化＝消費されてしまうなかで、日本

社会が聞き損なってきた在日朝鮮人の「生活世界」（歴史的文脈・社会経済的文脈・地域的文脈）を聞きとる場所に、この作品が位置しているからである。

ところで、スチュアート・ホールが指摘するように、人びとが求めるアイデンティティの概念は、「存在証明」である前に、他者による表象を内面する過程であり、一方で、さまざまな言説の実践や位置によって変化・変形する過程であるとするならば、「アイデンティティは、言説の外側ではなく内側において構築されるもの」であり、「自己の物語化」によって成立する過程として捉えなければならない [Hall, 1996=2001:12]。とすれば、ここで重要なことは、「在日三世のカフカ」や「症例E」の語る「自己の物語化」が、他者の表象を内面化した語りであるとき、それは、どこで・どのような言語として、どのような形で語られているかということである。すでに述べたように、それらの語りは、社会から孤立した特定の言説空間（大学の教室や病院のカウンセリングルーム）の教師や医師の言説実践によって生成・変換されている。それらとは対照的に、「みっちゃん」の呟きは、そのまま「みっちゃん」の言葉として描かれている一地方都市の方言によって。

在日朝鮮人が求める、あるいは求められる「自己の物語化」が、歴史的に在日朝鮮人の集住地域（大都市インナーエリア、地方の重化学・鉱工業都市）に形成されたエスニック・コミュニティの言説実践と乖離した形で語られるとき、個別のアイデンティフィケーションの言説編成（否定的なもの・対抗的なもの）として、どのような場所で、誰にむかって産出されているかを注視する必要がある。なぜならば、歴史社会学的アプローチから「日系アメリカ人」を対象としたエスニシティ研究を行なった南川文理が指摘するように、「多くの移民やマイノリティは、アメリカのなかでも特定の地域や都市に集中し、そこにエスニックな空間を作り出す。また、地域に応じて、日系人を取り巻く人種エスニックな人口構成や社会経済的条件は大きく異なっており、それに依って言説編成も変化している」 [南川、2007:17] からである。

4 エスニック・マイノリティ？

戦後、日本社会のなかで、在日朝鮮人は一貫してエスニック・マイノリティ集団のなかのマジョリティを占めてきた。それが大きく変化するのは、80年代以降に経済のグローバル化が進展したこととともない、国境を越えたヒト・モノ・情報の移動が日常化するなかで、日本国内のエスニック・マイノリティの勢力図（入管法の改正・自治体の住民政策の変化）が塗り替えられたことによる。特に、1990年の入管法（「出入国管理及び難民認定法」）の施行により、日系人労働者の雇用が合法化され、それを契機に、日本国内にはアジア系、中南米出身の移住労働者が急増した。90年代には、外国人登録者数は100万人を突破し、2007年末の日本国内の外国人登録者総数は、215万2,973人で過去最高となった。この数は、10年前（1997年）に比べて67万226人（45.2%）の増加である。外国人登録者が日本の総人口1億2,777万1000余人（2007年10月1日現在推計人口）に占める割合は、1.69%となった [入管協会、2008]。

表1 国籍(出身地)別外国人登録者数の推移(各年末現在)

国籍(出身地)	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007
総数	1,512,116	1,556,113	1,686,444	1,778,462	1,851,758	1,915,030	1,973,747	2,011,555	2,084,919	2,152,973
中国	272,230	294,201	335,575	381,225	424,282	462,396	487,570	519,561	560,741	606,889
構成比%	18.0	18.9	19.9	21.4	22.9	24.1	24.7	25.8	26.9	28.2
韓国・朝鮮	638,828	636,548	635,289	632,405	625,422	613,791	607,419	598,667	598,219	593,489
構成比%	42.2	40.9	37.7	35.9	33.8	32.1	30.8	29.8	28.7	27.9
ブラジル	222,217	224,299	254,394	265,962	268,332	274,700	286,557	302,080	312,979	316,967
構成比%	14.7	14.1	15.1	15.0	14.5	14.3	14.5	15.0	15.0	14.7
フィリピン	105,308	115,685	144,871	156,667	169,359	185,237	199,394	187,261	193,488	202,592
構成比%	7.0	7.4	8.6	8.8	9.1	9.7	10.1	9.3	9.3	9.4
ペルー	41,317	42,773	46,171	50,052	51,772	53,649	55,750	57,728	58,721	59,696
構成比%	2.7	2.7	2.7	2.8	2.8	2.8	2.8	2.9	2.8	2.8
米国	42,774	42,802	44,856	46,244	47,970	47,836	48,844	49,390	51,321	51,851
構成比%	2.8	2.8	2.6	2.6	2.6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.4
その他	189,442	199,805	225,308	245,907	264,621	277,421	288,213	296,848	309,450	321,489
構成比%	12.6	12.9	13.4	13.8	14.3	14.5	14.6	14.8	14.8	14.9

出典 [入管協会2008:9]

外国人登録者数を国籍(出身地)別にみると、「中国」が60万6,889人で全体の28.2%を占め、戦後一貫して最大の構成比を占めていた「韓国・朝鮮」の59万3,489人(27.6%)を抜いて、最多となった(表1)。そして「韓国・朝鮮」は、1991年末の69万3,050人をピークに、その後は減少を続け、2007年末には59万3,489人まで減少した。この外国人登録者数の国籍(出身地)別の構成比の変化は、戦後の日本社会においてエスニック・マイノリティのなかの多数者を占めてきた「在日朝鮮人」が、数的な意味でその“地位”を明け渡し、文字通りに「エスニック・マイノリティ」のなかのひとつの集団に過ぎなくなったことを意味する。この減少は、90年代に入って在日朝鮮人の「特別永住者」は減少したことによって説明される⁶⁾。この10年間で、「特別永住者」数は22%減少し、2007年末現在で42万6,207人となった。ここで重要なことは、この時期、在日朝鮮人が数的に減少し始めたまさにそのとき、在日朝鮮人のアイデンティティ・ポリティックスをめぐる言説編成が争点化したということにある[福岡・辻山, 1991][金, 1999]。他方で、外国人登録者数の国籍(出身地)別の年齢構成の特徴が示すように、「20歳から39歳まで」の年齢層(労働力人口の中心層)において、「中国」「ブラジル」「フィリピン」が高い割合を占め、日本国内では「外国人労働者問題」が浮上していく。

また、『在留外国人統計』(平成20年版)の巻末にある「外国人登録者総数上位100自治体」の市区町村別の外国人登録者数において、上位にある自治体をみると、第1位が大田市生野区(外国人登録者総数の93.2%が「韓国・朝鮮」)、第2位が東京都新宿区(外国人登録者総数の43.8%が「韓国・朝鮮」)、第3位が東京都足立区(外国人登録者総数の40.3%が「韓国・朝鮮」)、第4位が東京都江戸川区(外国人登録者総数の26.8%が「韓国・朝鮮」)、第5位東京都港区(外国人登録者総数の16.3%が「韓国・朝鮮」というように、外国籍住民の集住地域は、依然として在日朝鮮人を中心とした地域であることが分かる。

もちろん、これらの集住地域の特徴は、それぞれ、外国籍住民人口の規模・密度と流入時期によって異なる。渡戸一郎は、これらの集住地域を、戦前からの「大都市の既成市街地や旧来型鉱工業都市を典型」とする在日朝鮮人の集住地域と、「大都市への集中と地方工業都市へ分散」する「中国」「フィリピン」「ブラジル」など

表2 外国人集住地域の諸類型

	大都市都心型	大都市インナーシティ型	大都市郊外型	鉱工業都市型	観光地型・農村型
オールドカーマ中心型(既存市街地・旧来型鉱工業都市)		大阪・京都・神戸・川崎 荒川区・足立区等の在日朝鮮人コミュニティ、 横浜・神戸等の中華街 *1			
ニューカーマ中心型(大都市中心部から郊外や地方へ分散)	東京都港区・目黒区等の欧米系コミュニティ	東京都新宿・池袋・上野 周辺のアジア系コミュニティ、 川崎・横浜・鶴見、 名古屋・栄東、神戸・長田等の マルチエスニック・コミュニティ	相模原・平塚市等(南米日系人)、 横浜1区地(マルチエスニック・コミュニティ)	群馬県太田・大泉・伊勢崎、 浜松・豊橋、豊田、 大垣、四日市等の南米日系人コミュニティ	温泉観光地等(フィリピン人等)、 山形・福島等町村(アジア系配偶者)、 岐阜等(アジア系研修生)

*1 引用者が一部加筆修正をした。

出典 [渡戸2006:119]

地域産業に吸引される移住労働者の集住地域に類型化した(表2)。このタイプのポイントは、エスニック・コミュニティが形成される“中心核”が大都市のインナーシティであるということである[渡戸、2006:118-119]。

先にみた『在留外国人統計』(平成20年版)の「外国人登録者総数上位100自治体」において第1位であった大阪市生野区、第3位であった東京都足立区のような、歴史的に大都市のインナーシティの製造業の労働市場に吸引された在日朝鮮人の集住地域(第29位の川崎、第51位の神戸・長田なども含む)は、地域産業のニッチ産業(エスニック・エンクレイブ)を核としたエスニック・コミュニティとして、90年代以降、「中国」や「ヴェトナム」「フィリピン」などの流入により多国籍化し、マルチエスニック・コミュニティへ変容した地域である。たとえば、筆者が調査した東京足立区のエスニック・コミュニティのヘップサンダル業は、60年代にピークをむかえ、その後は在日朝鮮人一世の女性高齢者の内職業として残り、80年代には韓国からの出稼ぎなど新規参入層の受け皿産業となっていく。戦後、このヘップサンダル業の技術導入は神戸市長田区のケミカルシューズ産業からの同郷ネットワーク(社会資源)によってもたらされたものである。また、その神戸市長田区のケミカルシューズ産業については、戦前からのゴム工業に従事していた朝鮮人が戦後も引き継ぎ従事するようになり、現在では、地域産業としてのケミカルシューズ関連事業所の8割を在日朝鮮人の自営層(メーカー、加工業者、内職)が占めるにいたっており、70年代以降はヴェトナムからの新規参入層等が労働力として吸引されてきた地域である。これらのエスニック・コミュニティの在日朝鮮人の多くは地域のなかでの社会資源の活用によって後継者として育っていった[文、2006]。

自分は長田生まれの長田育ち。地元を離れたのは高校卒業して2年間だけかな。当時(70年代)は、在日メーカーの親方たちが、お金を出して、長田の朝鮮人の加工業や内職の息子たちが靴屋のなるように、東京の靴学校に行かすのが慣わしだったから。

(1958年生れ・在日朝鮮人二世)

他方、第2位の東京都新宿区、第4位の江戸川区、第5位の港区は、グローバル経済がもたらしたIT情報産業、金融業など高度専門・技術職に従事する外国人技術者から自営業・サービス業にいたる、さまざまな職業に従事する外国人住民の衣食住の生活空間・消費空間が拡大した地域である [Sassen, 1998=2004]。

表3 外国籍住民の就労形態と職種について (国勢調査2000年より)

就労形態	韓国・朝鮮		中国	フィリピン	ブラジル				
	常雇	49.1%	59.4%	46.3%	67.4%				
臨時日雇い	12.3%	27.6%	46.2%	30.8%					
経営層(役員・自営業主を含む)	31.4%	10.5%	3.6%	1.4%					
家族従業員	7.2%	2.5%	3.9%	0.3%					
職種	全体	1 生産工程	2 9.0%	生産工程	4 5.0%	生産工程	4 5.0%	生産工程	8 9.3%
		2 販売	1 8.0%	サービス	1 7.0%	サービス	3 1.2%	サービス	2 6%
		3 サービス	1 7.1%	専門・技術・管理	1 3.4%				
	男性	1 生産工程	3 5.9%	生産工程	4 0.4%	生産工程	7 1.0%	生産工程	9 0.9%
		2 販売	1 8.6%	専門・技術・管理	1 7.8%	サービス	7 7%	専門・技術・管理	1 3.9%
		3 サービス	1 1.6%	サービス	1 7.1%				
	女性	1 サービス	2 4.7%	生産工程	4 9.8%	サービス	3 9.1%	生産工程	8 6.8%
		2 事務	2 4.1%	サービス	1 6.9%	生産工程	3 6.1%	サービス	4 8%
		3 生産工程	1 9.5%	事務	1 0.0%	専門・技術・管理	1 0.9%		

出典 [西村, 2006: 7-8] の表4と表6から作成 注: 職種は上位3位までを掲載

また、具体的な就労実態についてみると、国勢調査データ(2000年)を分析した西村雄郎によれば、「韓国・朝鮮」の「経営層」31.4%に対して、「中国」では10.5%に過ぎない。また「フィリピン」の常雇いが46.3%で、それは「中国」、「ブラジル」でも3割に過ぎない。職種では、「ブラジル」の「生産工程職」が89.3%と高い比率を示すのに対して、「フィリピン」では、男性の71%が「生産工程職」、女性の31.9%が「サービス業」というジェンダー差が出ている [西村2006: 8-9]。これに対して、「韓国・朝鮮」は、特定の職業に集中していない(表3)。これは、韓国国民登録台帳をもとに全国規模のサンプリング調査(調査対象者1280人で有効票899人、回収率70.2%)を行なった『在日韓国人の社会階層と社会意識全国調査』[在日韓国青年商工人連合会1997]の調査結果と一致する内容でもある。この調査によれば、在日朝鮮人の職業的特徴として、①自営業が日本人の2倍強であること、②親から引き継いだ資源とインフォーマルなネットワークにより地位達成がなされた結果、地理的な移動が制約され、「25歳～39歳(三世以降)」では約7割が「非移動者」であり、日本人と比較しても地域間移動率が低いことが明らかになっている。とくに「初職地」では、「中京大都市圏」「阪神大都市圏」において、「非移動者」の比率が約9割を占め、これらの地域では、世代内での職業キャリアが初職地で行なわれる傾向が顕著である [稲月, 1997: 31-43]。このことから、在日朝鮮人の集住地域と職業的地位の獲得(社会資源の活用)の間に相関があることが分かる。具体的には、戦前から地域社会で生活基盤をつくってきた在日朝鮮人が、どのような社会資源(雇用、教育、居住、同郷ネットワークなど)を所有してきたのか、また、そのエスニック・コミュニティがどのように形成されてきたのかの事情が分かる。これらのマクロデータが示す外国籍住民の特徴は、移住の時期、移住の契機、

就労や家族構成、子どもの教育、かれら彼女らが暮らす地域社会（コミュニティ）のあり方によって異なっている。にもかかわらず、どの地域でも共通して流通する在日朝鮮人の物語がある。

5 アフター・コミュニティ？

三河島駅を降りて、左側の道を真っ直ぐに進むと、通称「朝鮮マーケット」に行き着く。そこは秋夕（陰暦8月15日）の頃や、あるいは年末の頃には新年名節の準備で「在日」の人びとの買い物客でにぎわう。三河島駅周辺には、このマーケットの他にも「銀行」「商工会」「病院」「学校」などがある。小さな路地裏に入ると、玄関先の表札にふたつ「名前」が並んでいる家に出会う。たとえばそれは、「木村」と「李」、「新井」と「朴」、「高山」と「高」というように並んでいる。その路地には一日中ミシンの音が響いている。…通りには、「ウォル、ファ、ス、モク…（月、火、水、木…）」とゴムなわ遊びをする子どもたちの声があり、買い物に行く近所のアジュマ（おばさん）たちの姿がある。とくに、白髪をカリマ（真っ直ぐに分けた）して、真っ白なチマチョゴリ（韓服）を着て、とことこと母乳車を杖代わりに押して歩くコネッチムのハルマン（おばあさん）の姿が印象的である。「コネッチムのハルマン」の名前の由来が、「コネリ」（高内里）村の出身であるおばあさんだということを知ったのは、ずいぶん後のことだったと思う。[文、1994：129-130]

筆者が調査で訪れた90年代初頭の東京の下町・三河島の情景には、マッキーヴァーが述べたような、コミュニティの基本的な特徴である「共同生活が行なわれる地域空間」[Maclver, 1917=1975]が実体的なものとしてあった。エスニック・コミュニティの要件には、エスニック・ネットワーク（親族・地縁などを媒体とした衣食住の確保、同郷集団・親睦会、冠婚葬祭の手伝い）など、社会資源によって生活空間が充足されることが必要であろう。かつてのエスニック・コミュニティの中心には、集合意識を強化し、次世代を教育する機能を担う民族学校があり、経済的生活の基盤となる銀行や生活を守る病院があり、ふるさとの物産を扱う商店が並び、何よりもその路地裏には「日本語」とサテウリ（済州島の方言）が混在する風景が広がっていた。エスニック・コミュニティで生活する人びとの仕事はさまざまであったが、その多くは自営業者であり、地元の零細工場を営むもの、飲食店の経営者、同胞系の銀行や学校、病院勤務など、エスニック・コミュニティの生活世界のすべてを支えるものであった（そのような時代であった）。民族学校出身で、同窓生と結婚し、親の仕事を継いで、子どもも民族学校に通わせる。そうすれば、安心である。では何が安心なのか。日本社会の差別や偏見の風が吹かない場所で、子どもたちの世代を守ることができるからなのか[文、1994]。

在日朝鮮人の集住地域である東京都荒川区では、調査当時の2007年末現在においても、区内の外国人登録者総数13,958人中、「韓国・朝鮮」が7,391人（53%）と、他の地域と比較して依然として外国籍住民層の多数を在日朝鮮人が占めていた[入

管協会、2008]。東京荒川区・足立区は、1990年代以降、就労・留学などを目的として流入したアジア系の人びとを中心とするマルチエスニック・コミュニティが形成される池袋・新宿などと異なり、戦前から朝鮮人が一定数で居住してきた地域である。同じように、戦前から朝鮮人の集住地域であった大阪生野区や神戸長田区なども、急激な産業構造の変化を経てもなお、中小零細工場が集中する製造業中心の地域という特徴をもっている。これらの在日朝鮮人の集住地域でのインタビュー調査のなかで語られた「エスニック・コミュニティ」の物語に共通しているのは、他のどこにもない「ホームタウン」がもつ安心感である。筆者のインタビューのなかで、ある人は、親睦会ネットワークを基礎としたエスニック・コミュニティの形成史を語った。ある人は、集住地域に引越して手に入れた「安心感」を語った。またある人は、地域で積み重ねてきた仕事の「成功」を語る一方で、そこにはエスニックな境界が存在することを語った [文、2006]。

・地域の形成史について

戦前から三河島、町屋には高内里の人がいて、編み上げ靴の仕事をしていた（工場の工員）。その他に、南海出身者（西帰浦）も皮をなめす仕事をしていた。もともとそういう技術を故郷で持っていたから。軍需品の皮靴や皮靴の切れ端をもらってきてバンド（男性用ベルト）をつくっていた。それが、戦後になるとカバン屋になっていった。現在の足立、墨田には南海出身者が多い。

(1929年生れ・在日朝鮮人二世)

・民族文化について

ここ（足立区・西新井）に来て、第四（民族学校）でチャンゴの会に参加できてすごくうれしかったです。私は日本人学校の出身で、ずっとこういうのにあこがれていた。ここだと、みんな韓国人だから、安心。美味しいキムチもすぐそこで売っているし。…最近のオモニたち悩みは、日本社会でどうやって子どもたちを守るか。民族教育だけでなく。

(1972年生れ・在日朝鮮人三世女性・パート従業員)

・仕事について

長田の「在日」は親の仕事を継ぐ人が地域的に多い。自分も次男だったが、親の半強制的な命令で後を継いだ。はじめの頃は、夜中の2時、3時まで働いて仕事を覚えた。「息子だから…」という目で見られるのがいやだったから。短時間で仕事を覚えた（現在、うちは糊引き業界で第5位のシェアを誇るようになった）。

(1964年生れ・在日朝鮮人二世・糊加工業者)

・エスニックな境界

もともと長田は「在日」が多い地域。あまり差別を感じないで生きてき

た。…地域のなかで、求人する場合は、「韓国人」が優先。次ぎに「日本人」、「ヴェトナム人」の順番で雇う。外国人労働者はギャラ感覚で働いているから、少しでも日当・賃金がいいとそこに動く（日本人も「在日」も同じ日当なら、居心地のいい方で働くが、彼らはギャラしかみない）。

(1947年生れ・在日朝鮮人二世・ケミカルシューズメーカー)

インタビューのなかのかれら彼女らの語りは、たしかに、在日朝鮮人の求める「アイデンティティの境界性」（文化的状況・経済的状況に規定）、「アイデンティティの補完性」（社会的状況と政治的な状況に規定）によって形づくられる「エスニック・コミュニティ」の輪郭を示しているのかもしれない（そのように解釈することが本質主義的だと批判されようとも）。そしてそれが、在日朝鮮人の生活の場における言説実践であることも忘れてはならないだろう（文脈依存性）。事実、「長田だから…」「生野だから…」「三河島だから…」「西新井だから…」に続く語りの内容は、「在日の多く住む地域」「昔からこの辺りは在日が多かった」「ケミカルの仕事はみんなウリサラン(故郷の人)がやっていたから」などという、ある種の「共同性」を強化する語りによって支えられており、そこには、在日朝鮮人が集合的に表象する「エスニック・コミュニティ」が提示されている。

ただ、最後に補足するならば、これらの「エスニック・コミュニティの物語」は、筆者＝インタビューアの背後に隠れている日本社会にむかって発せられたものである。一応に、インタビューアが求める言葉、たとえば、「共生社会」という言葉に対して、かれら彼女らが肯定的な意見を述べる時、その瞬間、かれら彼女らはインタビューアの先に日本社会の“構え”を見つけて、在日朝鮮人をめぐる差別や排除の言説を回避していたように思われる。かつて、筆者自身もインタビュー場面で、在日朝鮮人の「自己の物語化」を聞き損なうことで同じことを反復しているのに気付かなかったかもしれない。「エスニック・コミュニティ」を見つけようとして、そこに固有の歴史や故郷が実在すると信じて、日本社会の内部にいる筆者のいるその場所から問うことを放棄していたかもしれない。在日朝鮮人と名指される・表明するかれら彼女らの「語り」を聞き分ける耳をもてなかったことに無自覚だったかもしれない。

6 結びにかえて

コミュニティが崩壊するまさにそのとき、アイデンティティが創りだされる。

[Young, 1999=2007: 416]

バウマンが指摘するように、今日、はたして「コミュニティの代用品」[Bauman, 2001=2008, 26]として、「アイデンティティ」が争点化しているのだろうか。それは、歴史的に外部から囲い込まれて形成されたエスニック・マイノリティの「コミュニティ」では、限定的ではあるが、当てはまるといえよう。バウマンは、「コミュ

ニティ」には、「権利上の個人の運命を事実上の個人の能力に作り替えるのに必要な資源の平等化」と、「個人的な無力や不幸に対する集団的保障の構築」という2つの課題があると指摘する [Bauman, 2001=2008: 203]。そのような課題を克服する場所がエスニック・コミュニティであるとすれば、今日のエスニック・コミュニティの代替機能として、「資源の配分の平等」(教育・職業的階層的な地位の達成)や「集団的な保障」(アイデンティティ・ポリティックスの構築)をめざす「承認をめぐる闘争」[Honneth, 1992=2003]が浮上するというのは理解できよう。

その一方で、エスニック・コミュニティの囲い込み(職業上の地位達成を可能とする移動障壁等)が、皮肉にも、集合的なアイデンティフィケーションの言説編成を編み出している。どこの・誰でもない在日朝鮮人の「自己の物語化」が聞き損なわれている同じ場所で、このエスニック・コミュニティの集合的なアイデンティフィケーションが深化していることに気づかなければならない。在日朝鮮人に求められる「自己の物語化」と「エスニック・コミュニティの物語化」をめぐる集合的な表象の相互作用の過程を明らかにするためには、具体的なエスニック・コミュニティの形成に関わる社会経済的な条件や、地域の物語(モデル・ストーリー)を分析しなければならない。その詳細な分析は別稿に記したい。

[注]

- 1) 酒井直樹は、日本社会では「日本人」「日本語」「日本文化」(「国民」「国語」「文化」)の三種のセット(属性)が社会的現実において効果をもち、異なった社会のあり方が創造できないことを指摘している。日本社会では、ある人が「日本人」であっても「日本文化」を内面化しない事態や、「日本語」を使用するにもかかわらず、「日本人」でないという事態が、異常例として排除されてきたという [酒井, 1996: 141-144]。最近では、「ノーベル賞日本人三氏」という新聞報道等に対して、三氏の一人のなかに、1950年代末に渡米し、米国で研究生生活を続け、1970年にはすでに米国籍を取得している南部陽一郎氏が含まれており、そのことについて森果氏が「米国籍の日本人」と報じられることの違和感をコメントしているが、そこにも同じ指摘が含まれている ([朝日新聞] 2008年10月23日朝刊「私の視点」より)。
- 2) 本稿では、「在日朝鮮人」を日本社会における歴史的・社会的な存在として位置づける。つまり「在日朝鮮人」とは、1910年以降、「日本国籍」が付与され日本の植民地下の国策のもとで募集・徴用・徴兵等によって渡日した者から、終戦後の混乱と朝鮮戦争前後に難民・亡命者として渡日した者に至る人びとを含み、戦後、日本に滞在を余儀なくされた朝鮮半島出身者とその子ども・孫を含む人びとについての「呼称」である。戦後、日本国内の朝鮮半島出身者は、参政権の停止(1945年)や外国人登録令(1947年)を経て、サンフランシスコ平和条約終結後(1952年)には、日本国籍を一齐に剥奪され、以後、「外国人」として処遇される。外国人登録法・出入国管理令のもと、外国人登録書の国籍欄には「朝鮮」(出身地名)が記載され、それ以後、「ペーパー・ネーション」(書類上の存在・管理の対象)としての「朝鮮」が唯一のIDカードになっていく。そして、朝鮮戦争後、朝鮮半島では大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国という2つのナショナルな実体が、「在日朝鮮人」というマージナルな実体とは乖離した形で成立していく。日本国の政策的な“意図”(入管行政)や朝鮮半島の政治情勢などを背景

に、日本に生活する朝鮮半島出身者の「呼称」は、大雑把に区分すると、「在日朝鮮人」「在日」(~1970年代)→「在日韓国・朝鮮人」(1980年代~90年代)→「在日コリアン」「コリアン系日本人」「Koreans speaking Japanese」(1990年代後半~2000年代)というような、新聞メディアや研究者等の用語として変遷してきた[宮内、1999]。しかし、重要なことは、たとえば、1970年代の就職差別や80年代の指紋押捺拒否運動の中心を担った「民族差別と闘う連絡協議会」(1974年結成)が、「在日コリアン人権協会」(1995年)へ、組織改編し名称を変更したことに象徴されるように、90年代に入ると日本社会のなかで、「在日コリアン」(カタカナ呼称)が一般化し始める。これは、欧米のエスニック・マイノリティの運動による影響(アイデンティティの政治)と、日本社会のカタカナ呼称の支持によって「在日朝鮮人」の歴史性を無効化しようとする動き(記憶の抹消)とが連動した結果といえる。筆者は、これまでの調査報告書等において「在日韓国・朝鮮人」という呼称で統一してきたが、その場合、「朝鮮籍」「韓国籍」を有する朝鮮半島出身者という実体化した指示内容を含む用語として使用してきた。本稿では、「在日朝鮮人」という手垢にまみれた「呼称」を採用する。その理由は、現在、流布しているカタカナ表記の「在日コリアン」という新しい「呼称」が、独占的な事態を生み出すことで、「在日朝鮮人」(歴史性・社会性)が日本社会のなかで否定されてしまう事態を避けたいためである。

- 3) 上野は、「少数者: minority」は奇妙なカテゴリーであるとし、(社会的な)少数者とは、「社会資源の不均等配分を含む権力関係の用語」である。「定義上、自らを少数者と呼ぶことで、社会的に不利な立場に置く人々は考えにくい。だれかが対象を『マイノリティ化』しなければ、マイノリティは存在しない。つまり少数者とは、少数者化という言語実践の効果としてしか存在しない」[上野、2005: 30-31]と、社会構築主義の立場からの説明を試みている。
- 4) 被差別部落でライフストーリー・インタビューを行なった桜井厚は、「部落」をめぐる人びとの語り、一方では、差別と偏見を指す内容として表象され、部落解放運動のなかではその差別と偏見と闘い、たくましく暮らす地域を表象する語りとして生成されるが、他方で、「特定のコミュニティ内のそうした特権的な地位を占める語り」(モデル・ストーリー)は、社会的規範やイデオロギーを具現する語りである「全体社会の支配的な言説(支配文化)」(マスター・ナラティブ、ドミナント・ストーリー)と共振することもあれば対立・葛藤することもあると指摘している[桜井、2002: 36]。この指摘は、「在日朝鮮人」の物語(モデル・ストーリー)にもみることができる。日本社会のマスター・ストーリーへの対立・葛藤の例としては、1980年代以降の指紋押捺拒否運動に代表されるような「承認をめぐる闘争」[Honneth、1992=2003]に見いだされるモデル・ストーリーがある。また最近では、日本国籍取得者(在日朝鮮人)と日本政府が協働した「国籍取得特例法案(起案)」(2001年4月)の提出に象徴されるような「在日コリアン」の日本国籍取得への積極的な表明・言説[宋、2007: 226-228]に、日本社会のドミナント・ストーリー(成員資格の正当性を問う言説)への共振が見いだされる。
- 5) エスニック集団を規定するものをその集団が有する歴史や文化、地理的なまとまりのような客観的な指標(属性)で捉え、その指標が観察可能であるとする「客観主義的アプローチ」に対して、バルトは、エスニック集団を「その行為者自身の帰属、および同定という行為によって作り出されるカテゴリー」とし、当該集団と他の集団との関係および集団間の境界維持(「エスニック境界」)というエスニック集団の成員の主観的な帰属(文化・価値)とアイデンティ

ティを重視する「主観的アプローチ」を打ち立てている [Barth, 1969=1998: 10=1996: 26-27]。

6) 「特別永住者」とは、1991年制定の入管特例法によって法的地位が定められ人びとのことをいう。1947年に、「外国人登録令」によって登録義務が課せられた旧植民地出身者は、「外国人登録法」の対象者となり、その後、1952年のサンフランシスコ条約（「平和条約関連国籍離脱者及びその子孫」）の該当者として「協定永住者」とされ、91年改正（「日本国との平和条約に基づき日本の国籍を離脱した者等の出入国管理に関する特例法」）では、「法126-2-6該当者」を含めて、その他入管法上の「永住者」の一部を含む日本における法的地位を指す人びととされた。『法務年鑑』『法務時報』による帰化許可者数の推計によれば、1995年以降、年に1万～9千人のペースで「特別永住者」から「日本国籍」への変更がなされている [浅川、2003: 15]。

【参考文献】

浅川晃広2003、『在日外国人と帰化制度』新幹社。

Barth, F. 1969=1998, Introduction in Barth, F (ed.), Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference: Waveland Press. (=「エスニック集団の境界」1996、青柳まちこ編・監訳『「エスニック」とは何か』新泉社に収録論文)。

Bauman, Z. 2001, Community: Seeking Safety in An Insecure World: Polity Press Ltd, Cambridge. (=2008、奥井智之訳『コミュニティ』筑摩書房)。

Derrida, J. 1996, Le Monolinguisme de L' autre; Éditions Galilée (=2001、守中高明訳『たった一つの、私のものでない言葉』岩波書店)。

稲月正1997、「4. 地域移動」李龍熙発行人『在日韓国人の社会階層と社会意識全国調査』在日韓国青年商工人連合会。

Hall, S: 1996, Introduction: Who Needs Identity? In Hall, S. and Paul du Gay. eds.)

Question of Cultural Identity, London: Sage Publications. (=2001、宇波彰「誰がアイデンティティを必要とするのか」宇波彰監訳『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』大村書店)。

Honeth, A. 1992, Kampf um Anerkennung; Suhrkamp Verlag (=2003、山本啓他訳『承認をめぐる闘争』法政大学出版局)。

福岡安則・辻山ゆき子1991、『同化と異化のはざままで』新幹社。

石川准1992、『アイデンティティ・ゲーム』新評論。

市村弘正1994、『小さなものの諸形態』筑摩書房。

岩間暁子・ユヒョンチョン編著2007、『マイノリティとは何か』ミネルヴァ書房。

小森陽一2005、『母語幻想と言語アイデンティティ』上野千鶴子編『脱アイデンティティ論』勁草書房。

金泰泳1999、『アイデンティティ・ポリティックスを越えて』世界思想社。

黒川洋治2006、『在日朝鮮・韓国人と日本の精神医療』批評社。

MacIver, R. M. 1917, Community: A Sociological Study (=1975中久郎他訳『コミュニティ』ミネルヴァ書房)。

南川文里2007、『日系アメリカ人』の歴史社会学』彩流社。

宮内洋1999、「私はあなた方をどう呼べばよいのだろうか？在日韓国・朝鮮人？在日朝鮮人？在日コリアン？それとも」在日朝鮮人研究会編『コリアン・マイノリティ研究』第3号、新幹社。
文貞實1994、「『在日』コミュニティの可能性」奥田道大他編著『外国人居住者と日本の地域社会』明石書店。

文貞實2000、「震災とエスニシティー神戸市長田のケミカルシューズ産業の再生と共生のまちづくり」地域社会学会編『地域社会学会年報第12集—生活・公共性と地域形成—』ハーベスト社。

文貞實2006、「地域産業の発展と衰退に関わるエスニック・コミュニティの形成について～神戸市長田地域のケミカルシューズ産業と東京足立区関原地区のヘップサンダルを事例に～」『エスニック・コミュニティの比較都市社会学』平成14年度～17年度科学研究費補助金（基盤（A））（研究代表：広島大学・西村雄郎）研究成果報告書。

西村雄郎2006、「外国籍市民の流入とエスニック・コミュニティ～エスニック・コミュニティの分析視点～」『エスニック・コミュニティの比較都市社会学』平成14年度～17年度科学研究費補助金（基盤（A））（研究代表：広島大学・西村雄郎）研究成果報告書

西原理恵子2006、『パーマネント野ばら』新潮社。

桜井厚2002、『インタビューの社会学』せりか書房。

酒井直樹1996、『死産される日本語・日本人』新曜社。

Sassen, S. 1998, *Globalization and Its Discontents*; The New Press, NY (=2004、田淵太一他訳『グローバル空間の政治経済学』岩波書店)。

宋安鐘2007、「『コリア系日本人』化プロジェクトの位相を探る」『現代思想』（特集：隣の外国人—異郷に生きる）vol.35—7。

上野千鶴子2005、「脱アイデンティティの理論」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房。

渡戸一郎2006、「地域社会の構造と空間—移動・移民とエスニシティー—」似田貝香門監修『（地域社会学講座Ⅰ）地域社会学の視座と方法』東信堂。

Young, J. 1999, *The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity*, SAGE Publications, London (=2007、青木秀男他訳『排除型社会』洛北出版)。

財団法人入管協会2008、『平成20年版 在留外国人統計』。

(ムン ジョンシル・中部学院大学)